阿部充家と朝鮮[1]
―京城日報・毎日申報時代―

沈　元燮

아베 미츠이에（阿部充家）와 조선
―경성일보・매일신보 시대―

심 원 섭

要約

초대 조선총독 데라우치 마사다케는 무단통치, 공포정치의 대명사로 통하는 인물이다. 그는 조선병합에 공이 있는 귀족들을 통치에 이용하는 정책을 취하고 있었으나 그것은 오히려 역효과를 부를 뿐이었다. 총독부 기관지인 매일신보와 경성일보사의 총감독이었던 도쿠토미 소호 역시도 통치방침 면에서는 데라우치와 다른 점이 없었다. 이때 양 신문의 사장으로 부임해 온 인물이, 도쿠토미 소호의 심복이었던 아베 미츠이에다. 그에게 맡겨진 임무는 일본에 의한 조선 병합의 역사적 필연성과 동화주의를 선전하는 것이었지만, 그 임무 수행 스타일은 데라우치나 도쿠토미 소호와 크게 달랐다. 억압과 공포로 일관한 데라우치 스타일과 달리, 그는 낮은 자세로 조선의 리더들을 만나고 대화를 나누며 설득을 시도하는 커뮤니케이션 스타일을 갖고 있었다. 또한 조선의 문화와 역사, 종교를 존중하는 현지중심주의적인 사고방식도 갖고 있었다.

그리하여 그는 정치적 망명이나 무장 투쟁 노선 대신, 식민지 공간 내에서 생존하는 길을 선택했던 조선의 지식인과의 사이에 대화와 타협, 절충, 교섭의 여지가 있는 특특한 정치적 공간을 만들어냈다. 그가 많은 조선인들에게 애선자라고 불렸던 점, 반일 민족주의자였던 지식인 중 일부가 그에게 자발적으로 협력했던

1　この論文は、2018年１月20日、早稲田大学で開かれた第４回朝鮮文化研究会で行った講演の第３～７章に結論を新しく追加したものである。殆どの内容は、拙著、『阿部充家と朝鮮』（ソミョン出版、ソウル、2017. 1）の第３章を縮約したものである。日本語文の作成の際、専修大学の佐藤厚先生にお世話になった。感謝を申し上げる。

것은 그 때문이었다. 공포의 헌병정치로 일관한 데라우치 정부 하에서 대화와 교섭이 가능한 부드러운 정치적 공간을 창조해 내어 장기적이고 안정적인 식민지 통치의 기초를 구축하는 데 기여한 것, 이것이 아베 미츠이에의 정치적 역할이었다고 할 수 있다.

１．京城日報・毎日申報の存在理由

阿部充家（1862－1936）は1914年８月１日、朝鮮の京城日報及び毎日申報社の社長として赴任した[2]。第１次世界大戦が勃発した直後、翌年９月に予定されていた「朝鮮物産共進会」の開催をひかえた時期であった。総督府機関紙である『京城日報』と『毎日申報』は創刊時から徳富蘇峰が総管理者として監督責任を取っていた。

日本の外部に存在する新聞の中では一番規模が大きかった『京城日報』と『毎日申報』は、初代総督の寺内正毅の統制下で運営されていた。したがって寺内の朝鮮統治方針である同化主義の広報と実践は両新聞運営の第一の課題になっていた。管理責任者であった徳富蘇峰は、両新聞の存在理由は「天皇陛下の一視同仁」策、即ち同化主義の宣伝にあると明白にした。

> 統治の目的を達せんと欲せば（第一）朝鮮人をして、統治の已む可からずを観念せしむるにあり。（第二）統治を以って、自己に利益ありと思惟せし

2　阿部充家の生涯については、彼の一生の知己であった徳富蘇峰が次のように述べたことがある。

「諱は充家、無佛と号す。山崎町に生まれる。 本姓神山氏。資性俊敏にして真摯、眉目清秀の好漢なり。始め池辺吉十郎の門に学ぶ。東京に遊び、同人社に英語を修む。壮歳にして鹿児島に遊び、政治運動に興味を有し、後ち徳富父子の大江義塾の教師として専ら学生を指導す。徳富猪一郎氏が東都に国民新聞を経営するや其の社に入り、遂に副社長となり、同氏の事業を助け、又朝鮮に京城日報の発刊せらるるや、徳富氏の後援によりてその社長として活動せり。要するに明治二十年頃より大正初期においては東都操觚界の一大人物として其名を知られ、殊に日露戦役講和後及び大正二年所謂憲政擁護運動の際、両度国民新聞社のために、一身を 挺して群衆と闘ひたる献身的な行動は、世の嘖嘖称揚することなり。氏の政治運動は初期には藩閥攻撃に、中期には日本帝国膨張、朝鮮併合に全力を傾注し、最後には朝鮮同胞の扶腋援助に尽瘁せり。汲汲たらず、貧賤に戚戚たらず、終始一貫在野の国士を以って任ぜり。晩年には書画珍籍などの愛玩蒐集に趣味を有し、悠々として日を送れり。昭和11年１月１日没す。享年七十五。鎌倉東慶寺に葬る。」（「阿部無佛」『肥後人名辞書』肥後地歴叢書刊行会、1936）

むるにあり。（第三）統治に満足し、統治に悦福し、統治を楽しましむるにあり。＜中略＞若し三者等しく得る能はずんば、先ず前の二者を取れ。若し二者等しく得る能はずとせば、最前の一を取れ。＜中略＞しからば即ち如何にしてこの如くならしむる。曰く只た力あるのみ。

（徳富蘇峰、「朝鮮統治の要義 其三」『両京居留誌』民友社、1915）

誤解する勿れ、吾人は必ずしも朝鮮人を下級民として取り扱うべしと云わず。上もなく、下もなし。我が天皇陛下と、国法との眼中には、固より一視同仁也。日本人よりしては、固より同胞兄弟也。但た然るが故に、彼らは何時たりとも、再び日本帝国より分離し得ると云ふが如き、妄想を懐かしむべからずと云ふのみ。否な徹上徹下、子々孫々、彼らの運命は、日本国民たるの外、また日本国民として同化するの外、他に方便なきを観念せしむべしと云ふのみ。

（徳富蘇峰、「朝鮮統治の要義 其四」『両京居留誌』民友社、1915）

武断統治を基盤とした「上からの同化主義」の宣伝と洗脳、これが両新聞の存在理由であった。 社長として赴任した阿部に任された任務は、「朝鮮の独立不可能性」、「朝鮮人の近代的資質の欠如と啓蒙の必要性」、「日本の朝鮮統治の正当性」、「日本統治下における朝鮮の発展相」、「総督府の政策と実績の広報」などを大衆や知識人に宣伝し、「朝鮮の各地域に関するより詳しい地理情報」を確保・生産する作業など、出帆して四年しか経っていない植民地統治体制の基盤構築を支援することであった。

２．新聞運営の特徴

社長に赴任した阿部は、先任の吉野太左衛門が推進していた社屋の工事を完成し、十月に竣工式をおこなった。輪転機を設置し、鉛版に活字鋳造機の設備を完了し、写真部を新設し、夕刊発行を朝・夕刊発行体制に変えるなど、両新聞の物的な基盤を固めた。

社長本人の記事作成という面からみると、阿部のスタイルには目立つところがあった。彼は国民新聞時代と同じく、記事を殆ど書かなかった。二面もしくは三面に連載紀行文を三つ、漢詩数篇を残したのが全てである。

その紀行文さえも、彼の話を記者がまとめた形の文章であった。阿部の代わりに一面を中心にした紙面に頻繁に論説、紀行文などを連載したのは監督の徳

富である。彼は、京城滞在時は言うまでもなく、東京からも記事を精力的に書いて送ってきた。軽いエッセイ類の文章でも、彼の記事は殆ど一面の二、三段以内の空間に掲載された。

阿部の在任期の記事編成の特徴をみると、

１）記事編成の多様化

一面記事のジャンルが多様になった。政治、経済記事のほかにも、歴史や文化、宗教、教養とかかわった外部執筆者の連載記事が大幅に増えた。歴史分野だけを見るなら、関野禎、鳥居龍蔵、黒板勝美など朝鮮史専門家による連載物が増えた。古代史に集中した彼らの研究は、他律的な歴史観の流布、日鮮同祖論など、併合の正当性を裏付ける役割をはたしていた。

２）翻案小説の原作を「日本の家庭小説」から「西欧小説」に

第二に、読者の増加及び社勢の拡張の必要性と関連して、新聞社の設立初期から積極的に支援してきた連載小説欄の運営を大幅に「現代化」させた。先ず、1912年、趙重桓の登場とともに始まった翻案小説の連載方式を変えた。1914年半ばから、翻案小説の原作を「日本の家庭小説」から「西欧小説」に変えた。これは毎日申報社が、連載小説の読者を、女性中心ではなく、当時新に形成されつつあった青年・学生層を中心として設定したということ、近代小説に関する学習が新聞紙面を通して本格的に進行されていたことを意味する。これが1917年、韓国最初の近代長編小説である李光洙の「無情」につながるのである。（金栄敏,『韓国近代小説の形成過程』ソミョン出版、2005、咸台永、『1910年代の毎日申報小説に関する研究』延世大博士論文、2015）朝鮮の青年階層を中心読者に浮上させた新聞欄の運営こそ、当時毎日申報が収めた代表的な功績であったといえる。

３）家庭博覧会の開催

第三に、生活改善、風俗の教化とかかわった啓蒙記事の量が増え、その種類も多様になった。「日曜講話」、「時事小言」、「京城小言」、「新紀元」などの欄が新設された。この結果の集成というべき結果が、1915年、京城日報社が開催した「家庭博覧会」であった。当時開催中あった「朝鮮物産共進会」が工業生産品と地方特産物を中心として陳列していたのに比べ、阿部の「家庭博覧会」は、家庭生活の改善を標榜し、社屋内に住宅、厨房、育児、衛生、料理、家庭儀礼など、近代式家庭生活の姿を展示する企画であった。

４）紀行文の時代

第四に、連載紀行文を特集として積極的に運営した。これには、赴任５年目

を迎えていた寺内の治績を広報し、日本統治下において朝鮮がどれほど発展したかを広く宣伝するという政治的な戦略が背景にあった。植民地の産業、経済、文化地理の調査作業の一環でもあったこの企画には、日本の著名人、社内の日本人記者、朝鮮人記者たちが積極的に執筆陣として参加した。「大谷探検隊」で有名な大谷光瑞の連載がもっとも多く、監督の徳富も積極的に執筆陣に加わっていた。当時、毎日申報社の記者であった沈友燮は、後に李光洙が登場するまでは、第一の紀行文作家であった。文章を書かないことで有名な阿部充家さえも数篇を書かざるを得なくなるほどであった。阿部の数少ない紀行文の中には、植民地をみる彼の考え方がよく現れている。これについては後に検討する。

５）海外視察団

第五に、先任者に引き続き、総督府の「同化主義」の広報及び実践事業の一環であった海外視察団の組織・派遣事業を積極的におこなった。先任者の吉野や東洋拓殖会社、総督府が企画した海外視察事業は、主に日本全国の名所を均等な形で周る形であったが、阿部の企画には新しい特徴があった。日本が獲得した海外の新領土や日本の一部地域に絞って視察をおこなうかたちであった。「青島視察團」（1915）、「満州視察團」（1917）、「九州視察團」（1918）がその例である。

「青島視察團」（1915）事業は、第一次大戦参戦で獲得した青島をモダンな汽船で往復する企画で、日本人町が建設されている市街地とドイツ軍に勝利を収めた戦場を見学する企画であった。これには西欧列強の隊列に加わった日本の威容を、朝鮮のリーダたちに実感させようとする目的があった。

「満州視察団」（1917）は阿部が自ら引率団に加わった。日本が租借地として運営していた遼東半島を中心として、日露戦争の戦跡地と満州各地域の政治・経済状況、日本資本及び居留民の進出状況を視察する企画であった。この視察には、毎日申報に転向宣言文を発表した尹致昊も参加し、当局の施策に積極的に協力する姿を示したことがある。

「九州視察団」（1918）は日本の新興産業基地であり、朝鮮と歴史的な縁が豊かな九州地域のみを一巡する企画であった。九州視察の場合は、中・近世朝鮮と悪縁のある西郷隆盛、加藤清正の祠堂を参拝させたり、朝鮮人陶工など、連行されてきて日本に定着した帰化朝鮮人と対面させたりする内容が含まれていた。「不幸な過去を乗り越え、日本人に生まれ変わった朝鮮人」の先例を提示し、朝鮮でおこなわれている同化作業のばら色の青写真を提示しようとする意図であった。朝鮮人の歴史的な感情を徹底に無視し、抑圧する大胆な企画であ

り、「上からの同化」策を根幹としていた寺内時代の慣行がよく表れている例であったといえる。

６）鮮内の視察企画

一方、朝鮮内の企画としては「漢陽城巡城」、「開城拾栗會」、「釋王寺探勝」、「元山視察團」、「金剛山探勝會」、「八關會」、「京城踏査會」、「漢江觀火大會」など、ツアーを兼ねた地理学習企画を多数運営した。とりわけ「金剛山探勝會」は金剛山に特派員を派遣し、名所と名刹を巡回しながら紹介を続けたものであり、写真や挿絵を添えた記事が40日以上も連載されるほどであった。

７）朝鮮人英雄の活用―間接統治術の採用

第七に、排日活動で民衆の間で名望が高かった朝鮮人の「英雄」を社内に迎え入れ、同化主義の宣伝イデオローグとして活用した。中年層の英雄であった張志淵、尹致昊、新青年層の英雄であった李光洙が代表的な例であった。旧朝鮮の無能性、同化の歴史的必然性や新朝鮮の発展相を、説得力のある朝鮮語で朝鮮読者に伝達する役割を遂行させた。

統治側と朝鮮人の間に、名望のある朝鮮人リーダを媒介項として配置し、統治の効率を高めるこの方法は、後日斉藤実が所謂「文化統治」時代に本格的に駆使していた間接統治術である。阿部は、強圧一辺倒であった寺内時代に、このようなレベルの高い統治術を独自に広げていたことが分かる。寺内が彼に酷い反感を持っていたのも無理ではない。

８）仏教記事の優遇

第八に、宗教関連記事、特に仏教関連記事が増えた。これには阿部自身が臨済宗の修行者であり、関連寺刹の運営に携わっていたこととかかわりが深い。朝鮮仏教の歴史や伝統に関する学術的な論説、寺刹や僧侶に関する紹介からはじめ、自分の師でもある釈宗演など日本の高僧を招聘して講演会を開催し、その活動ぶりや講演内容を積極的に掲載した。

３．植民地経営者としての阿部

阿部は「毎日申報」と「京城日報」に「湖南遊歴」（1916）（総９回）と「無佛開城雑話（1916.11）」（総２回）などの紀行文を発表したことがある。彼の談話内容を記者が整理したものである。なかでも前者が特に注目される。彼の湖南視察の目的は、米の増産とかかわって鉄道、道路、港湾など、インフラ投資が集中的におこなわれている湖南を現地視察することであった。

湖南線地方が米産の中心で、朝鮮の宝庫ということは

（「湖南線に入る」『京城日報』1916.9.26）

埠頭に出でて、港内を一見する。予は群山港を海とのみ思っていたのに、錦江下流だと聞いて吃驚した。晩秋以降に群山の米穀移出時期に入ると、税関付近の広場は米俵堆積に埋まり、非常の壮観を呈するとのことであった。

（「米の群山」 同、1916.10.2）

前には世界有数の多島海を控え、その港内は水深く、大船の停泊に適している。

（「木浦港小見」 同、1916.9.30）

以上のように、彼は湖南線の産業的価値、日本の食糧生産基地としての湖南の価値をよく知っている。近代資本主義の発展程度を評価する基準のひとつである港湾の水深問題もよく知っている。当時の紀行文が全てそうであったように、彼は新設された鉄道や道路など、発展していく朝鮮相を礼賛した。

当然であるが、彼は日本人移住民の生活ぶりに興味が深かった。大農場が密集している全州近隣地域を通過する際は、日本人農場主たちの成功談に深い関心を示した。一方、朝鮮の小作農は、白い朝鮮服姿で広い平原に点々と散らばっている牧歌的な原住民として彼には映った。軽工業育成という政策のもとで運営が始まった地方の養蚕所の朝鮮少女たちは、腕が良くかつ温順な植民地の民として描かれる。

朝鮮の宝庫という湖南地方を見つめる彼の目は、投資対象の価値を評価する事業家ないしは経済官僚のような目である。ひろく愛朝者、運動屋とよばれていた阿部であるが、彼の視線の中には、植民地支配を批判的に捉える意識は一切ない。自分が、立ち遅れている「兄弟国」を保護しながら、近代化という恩恵を施している先覚者であるという自意識に充満している。朝鮮の民は、この新しい開発時代の恵みを満喫しながら「文明人」として開花する日を待つ善良で純粋な原住民たちである。これが彼の別名でもある「朝鮮への同情者」が抱えている内面の風景であった。日本人の入植や総督府体制が順調に定着しつつある牧歌的な田園、これが彼が初めて巡回した南朝鮮の穀倉地帯の風景であった。

一方、彼は古建築や鄭夢周、李成桂等偉人の遺跡の前では相反した態度を見せた。例外なく尊敬の念を表した。仏教遺跡には特に深い関心を示し、当時と

しては先進的な考え方であったといえる「原型保存主義」を披瀝した。古・中世朝鮮には尊重を、現代朝鮮には憐憫と啓導の意欲を、これが朝鮮の過去と現在に寄せていた阿部の二つの目線であったといえる。

４．阿部の社外活動

総督府機関紙の社長であるはずの阿部の仕事ぶりには変わったところがあった。彼は公式的な業務のほかに、多くの人と会い、多くのところを踏査した。「現地重視主義」、「融和・包容主義」といえるほどの姿勢で、朝鮮の知識人と交流を楽しむ対人関係スタイルを持っていた。全国の寺刹巡礼も頻繁におこなった。京城日報社長の、この個人活動はあまりにも積極的であったので、寺内の不興を買うほどであった。

１）「愛鮮者」阿部充家

第一に、彼は国民新聞時代にもそうであったように、現場に行って朝鮮のリーダたちと話し合うことを始めた。最初は、朴泳孝、趙重応など、日本亡命客出身を含め、合併に功があった李完用、宋秉畯などの朝鮮貴族と付き合うことであったが、徐々にその対象は儒林をはじめ宗教界のリーダ、名望のある民族主義者、青年リーダ、学生世代に移っていた。巨大新聞社の社長という外観とは異なり、彼の現場交際には気さくで意欲的なところがあった。

彼は、徳富蘇峰や寺内正毅、伊藤博文もそうであったが、「愛鮮者」と呼ばれることが多かった。彼の場合は、上記の社外活動に主な原因があったと思う。彼は使命感らしきものを抱えて朝鮮赴任に臨んだのではないかと推測される面がある。日本による朝鮮の合併という「崇志」、金玉均らと結んだという締盟の「崇志」を朝鮮人リーダに納得させ、彼らを同化へ「善導」するというのが、彼の使命感の中身ではなかったのかと推測される。

彼と会った朝鮮人が、実際に彼から「感化」を受けたかは確認できないが、日本側の記録では類似した記録が散見される。学費や職場斡旋など、彼に世話になった朝鮮の青年たちは、「無佛庵」という朝鮮家屋を彼に寄贈したこともある。

> 阿部無佛先生の存在は、京城日報社長としてよりも鮮内青年同情者として朝鮮青年の崇拝の的であった。朝鮮の青年等は、相謀って京城東小門の城壁の上に、家を建て、無佛先生に寄贈した。十坪ばかりの朝鮮家屋で、右と左が温突部屋で、中に板張敷があった。一方の温突は、他温突の倍位の広さで、

先生はその温突で青年と談笑するを唯一の楽としていた。青年は東京に留学したものが多く、東大、京大、九州大等の卒業生もあり、総督府の要人になったものも何人かいた。知事になって、地方へ進出したものも二三いる。

（中村健太郎、『朝鮮生活五十年』青潮社、1969）

2）朝鮮仏教や寺刹への探査

第二に、彼は仏教遺跡の探査に積極的であった。特に仏教遺跡や寺刹の運営、経典の保存状態、僧侶の修行の実態などに積極的な関心を持っていた。それは、伊藤博文や寺内、周りの日本人グループが持っていた略奪的なレベルの関心とは大分違う形であった。修行者でもあった阿部は、個人レベルで、朝鮮仏教の伝統や現在の実態を把握しようとする欲求、疲弊していた朝鮮仏教の復興のために努力したい欲求を持っていた。これは、日本の僧侶を朝鮮に留学させたり、朝鮮仏教史を日本に紹介するなどの帰国後の活動につながる。

3）朝鮮知識人との交際

第三に、彼は社外活動の中で多くの朝鮮知識人を周辺に集めた。彼の交際方法には、前述したように特別なところがあった。主に日本人側から出た見解という弱点はあるが、「朝鮮に対する理解者・同情者」と呼ばれるほど、朝鮮人に向かう彼の態度には、寛大さと包容性があった。立場を変えていうなら、寺内スタイルの恐怖政治に追いこまれていた朝鮮人たちは、若干の「同情」にも敏感に反応するほど、この優しくて寛容的な姿勢で話を聞いてくれる独特な日本人の周りに、避難するかのように集まってきたと云ったほうが正しいかもしれない。

赴任したばかりの阿部は、合併後、寺内に捨てられたと思い、不満が多かった貴族階級を始め、儒林、キリスト教、天道教、仏教界に次々と交際範囲を広めていた。特に「朝鮮王朝に忠誠心が強く、近代に抵抗感の多い頑固な儒林」のためには、社内の執務室に漢籍を用意し、朝鮮服に朝鮮冠をかぶり、接見をしたりもしていた。 彼の「啓導」を受けた地方の一儒者は、阿部の儒学に関する識見を賞賛する文章を毎日申報紙上に発表することもあった。

新聞経営と関連し、若い記者である方台榮、沈友燮、秦學文らを手下に置き、長く縁を維持していた。この青年記者陣は、斉藤実時代を含め、阿部の生前には彼の参謀として活躍した。玄相允、崔南善も阿部の周辺に集まる青年グループのリーダの一員であった。彼らにも毎日申報の紙面が提供された。1917年、

朝鮮訪問中に彼らの交際の現場を目撃した島村抱月は、彼らが阿部を崇拝する青年グループであると発言したことがある。

このように阿部は赴任初期から新青年世代との交際を積極的におこなった。日本の植民地支配に協力的な新しい青年世代を育成し、将来、彼らを朝鮮統治の緩衝勢力として活用しようとする意図、即ち「間接統治術」という新しい統治戦略が、彼の優しさと寛容さの中に含まれている「啓導」の基盤であったといえる。

５．阿部と朝鮮人英雄たち

次に阿部が集中的に力を入れたのが、「朝鮮の英雄」たちとの交際であった。合併後、日本の爵位提供を拒否し、隠居生活を送っていた尹用求（1853～1939)、「是日也放声大哭」(『皇城新聞』1905）の英雄である張志淵（1864－1921)、「105人事件」の首謀者として収監生活中であった尹致昊（1865－1945)、そして新青年世代の英雄李光洙が代表的な例であった。日本の統治者が、朝鮮内で名望のある知識人に手を広げ、彼らを朝鮮民衆との緩衝地帯に立たせる統治戦略は、「文化統治時代」からはじまったのではない。阿部は「直接統治」時代であった寺内時代に、すでにこのような作業を独自に広げていたのである。

１）隠者尹用求を訪ねた逸話

阿部の儒林への接近が最も劇的な方式で行われ、またその結果が政治的にうまく活用された例は張志淵であろう。その故、張志淵の場合は､彼が阿部に｢包摂」されたという説が韓国学界には広まっていた。一方的な包摂というのはありえないことであるが。

阿部が会った英雄の中、印象的な例がもう一つある。尹用求のケースがそれである。礼曹判書・吏曹判書出身であったが、乙未事変（1895）後、全ての官職や爵位を拒否し、山谷に隠居していた彼は日本人の間でも名が高かった。

阿部は赴任するや、張志淵に招聘の意思を伝える一方、山谷に隠居していた尹用求宅を自ら訪ねた。赴任後２ヶ月も経っていない時であった。尹用求宅はソウル東北側の山林地域、現在の長位洞にあった。記者である局外生と、画家の湯淺を同伴してのことであった。

功成を捨て、塵土を謝し、月谷で仙人の如く自然な生涯を送る氏は、儒冠襦衣で自ら堂上から慇懃に迎接し、主客が手を取り合い昇堂し、禮畢後に着

席したら、氏の其の閑居之風と朴素之態は傍座した余をして自然に仙境にいるごとき観念を自生せしめる。俗界に関する現時の論は、主客共に滅黙し、話頭を昔時の退渓、栗谷、愚渓先生の生前死後の学問及び事業等に関する談を交わし、互いに積年の親友と邂逅した如く追究詳論もし、或いは左右に並べる数百冊の古書を取り出し綜々分々し、＜中略＞氏は阿部社長との奇縁を記念するため、童子をして筆墨を準備せしめ、一首の詩を作之書之したため、其厚意に謝すため、湯浅画伯は、かの著名な精巧の筆を揮って氏の肖像を即時に書き＜下略＞。

（局外生、「出東門して月谷に訪海觀先生」『毎日申報』1914.10.9）

ラバに乗っている阿部は村の入り口で止まり、尹用求宅の位置を村の童子に訊く。山谷まで訪ねてきた京城日報社長を、尹用求は儒冠襦衣の姿で迎接する。二人は約束でもしたかのように、政治話は打っちゃって、朝鮮の名賢に関する談笑に入り、漢籍を捲る。総督府政策とか同化とかなどの話は一切ない。別れる際に、二人は漢詩と肖像画を交換する。

尹用求は節介を守る反日儒者として名の高い人物、即ち旧朝鮮知識人の大物である。赴任したばかりの阿部は、大物の「敵」を優先的な対話の相手として選び、京城の大韓門の前から遠い長位洞まで足を運び、彼を訪ねる。朝鮮内で統治権力第二位とよばれていた日本人エリートと、その反対極にいる頑固な朝鮮の儒学者が会い、好きな話ばかり交わしてから別れるこの記事を、同伴した記者は一幅の禅画のように描いた。

これが、阿部が朝鮮の英雄と会い、自分の「愛鮮者」としてのイメージを大衆に流布する交際スタイルの一つであった。このような阿部のスタイルについては李光洙も類似した証言を残したことがある。

阿部との出会いのなかで、尹用求は何を感じていただろう。尹は阿部が退任する時、次のように言ったと伝わる。

韓国時代に七回までも大臣に任命されながらこれを固辭して一度も受けなかったといふ風貌の尹用求氏の如きも、翁が大正６年、京城日報社長を辞して東京に帰ることになるや、大いにこれを惜しみ、「阿部さんは実に立派な人物だ。あの人が朝鮮に居て呉れたらよかったのに、誠に残念だ。阿部老のような人がせめてもう二三人も居たならば、両民族のためにどんなに幸せであろう」と述懐したという話もある。

（中村健太郎、「阿部無佛翁を偲ぶ（二）」『京城日報』1936.1.15）

尹用求は阿部が日本に帰った後も彼との友情を持続したという。

２）三顧草廬の「契約」－張志淵

張志淵といえば、朝鮮の大衆には「是日也放聲大哭」（1905.11）と投獄で反日民族主義者として崇敬されている人物であった。阿部は尹用求を訪ねた10月、秘書の方台榮を通して張志淵に入社を勧めた。張志淵が固辭したら、阿部が自ら彼を訪ね、説得を図った。張志淵はかつて毎日申報を激しく非難したことがある。張は前提条件を提示した。

10月、方台榮がソウルからやってきた。毎日申報社社長の阿部充家が予を招聘する件のためであった。彼は一緒に行きましょうと頼んだが、予は固辭し、二度と報館には入らないと誓った。＜中略＞その時、息子がソウルで乱れた生活を送っているというので、已むを得ず、11月に出発してソウルに到着し、壽洞の綠洞鮮于一の家で宿した。翌日石農, 柳瑾など親友たちが旅館に訪ねてきて飲酒で毎日をすごしていた。

10日ほど経ち、阿部無佛がまた来て執筆を頼んだが、余は固く断り、応じなかったが、三つの条件を要求した。一つ、客礼で待遇すること。社員という称号は許さない。二つ、文章は逸事と宗教、風俗などに関したもので旅館で書いて社に送る。社内に入って執筆はしない、三つ、社長が辞任し帰る時は余も同時にやめて帰る。そうでないと受諾できない。社長はすべてを承諾してくれた。彼が辞任して帰る時、私も即時やめて帰省した。

（「張志淵の自述年譜」（『年譜と評伝』２号、2009））

阿部は53歳、張は51歳の時であった。こうして毎日申報の客員論説委員になった張は、1914年12月末から1918年12月までの四年間、約700篇に至る学術・教養論説、紀行文、漢詩などを書いた。彼は朝鮮人の筆者の中では最も多い連載文を短期間に毎日申報の第一面に発表した人物であったと思う。

無論、彼は自分が約束した文章のほかに、政治的な文章も多く書いた。朝鮮王朝や伝統的な価値観を批判する文章、総督府の治績を宣伝する文章、露骨な同化主義の宣伝文、対日協力の根拠を提示する思想的な文章も書いた。彼は阿部の真の招聘意図に忠実に応じたつもりである。彼は阿部が退任してから、約

半年くらいを勤務して退社した。

実は彼は、大韓自彊会、大韓協会の改新儒学派のリーダとして活動していた時期に、すでに次のような考え方の持ち主になっていた。

> 露・日戦で勝利を収めた強国日本に武力で対応することはできない。国権を回復することができなかった原因が実力を養成しなかった内部にあるゆえ、暴力的な反日闘争はむしろ国権の回復の妨げになる。
>
> （「自彊會問答」、『大韓自彊會月報』２号）

彼は合併以降は、日本をアジアの覇者と認めていたし、中国の崩壊と朝鮮の敗亡も非合理的なことではなかったと思っていた。こういう状況は、翌年阿部と縁を結ぶことになる尹致昊も同じであった。

阿部の勧誘は、このような張の変化を読み取った上での試みであった可能性がある。阿部と張との出会いは、そういう意味で、権力の一方的な強要に植民地の知性が屈服したケースであるとはいえない。阿部は張が世間に出る名分を丁重に提供し、張はその機会を優雅に利用したといったほうがいいかもしれない。

３）盾が必要であった尹致昊

「文明地上主義者」とよばれている尹致昊も張と類似した考え方を持っていた。日本は「非西欧国家の中で唯一文明化に成功した優等国」であるゆえ、合併は大勢として受け入れるしかない、抵抗は無駄なことだと考えていた。そうであった彼が「105人事件」の首謀者になり、六年という重刑を受け、収監生活を送っていたのは不運であったかもしれない。阿部が赴任二年目を迎えていた1915年２月頃、特赦で出獄した尹致昊は３月に毎日申報社を訪ね、阿部と挨拶を交わした。３月14日、彼は公式的な転向宣言文を毎日申報に発表した。

> 我が朝鮮民族はあくまでも日本を信頼し、互いの区別がなくなるまで努力する必要があると思う。＜中略＞これからは日本のあらゆる有志紳士と交際し、日・鮮民族の幸福のため、日・鮮両民族の同化のため、そういう企画には最大尽力するつもりである。
>
> （「本社長を訪問した尹致昊氏―余は大いに誤解していた」）

以降、尹致昊は過剰なほど当局に協力するポーズをとることになる。京城日

報社が主催する行事に積極的に出席し、徳富蘇峰と阿部、趙重応、中村健太郎とも関係を持つ。1917年４月には阿部と共に満州視察団にも同行した。視察が終わってからは、満州の朝鮮人の生活環境が著しく改善しているし、朝鮮人を保護するため日本が万全を期している姿に感動したという内容の感想文を毎日申報に発表する。同じ紙面には、満州の朝鮮人の困窮を指摘し、日本の保護政策が消極的であることを皮肉っている在満朝鮮人の文章が掲載されていた。

朝鮮の英雄を包摂する必要があった阿部と、国内においての生存と実力養成運動のため盾を必要としていた尹致昊との「契約」はこういう形で始まっていたのである。

４）新青年世代の英雄、李光洙との取り引き

東京留学生界の英雄であり、警察の「甲号」監視対象であった若い民族主義者李光洙は、1916年の秋に阿部と出会う。その後、1917年末まで、彼は「毎日申報」紙上に、休むことなくひたすら書き続ける時代を迎えることになる。その期間中、彼は毎日申報社の要請により、問題的なテキスト一つを長期連載することになる。日本統治５年を迎えた朝鮮の状況を自分の目でみて診断をしてくれ、という要請で書くことになった「五道踏破旅行」（1917.6.29－）がそれである。執筆の要請の真意が、日本の統治下で朝鮮がどれほど発展を成し遂げたのかを証言してくれ、というところにあったのは言うまでもない。

「五道踏破旅行」の中で、李光洙は変わっていく新朝鮮と、立ち遅れた状態に留まっている旧朝鮮の世界を描いていく。朝鮮が立ち遅れた理由が朝鮮人の資質不足にあると力説もする。目の前に広がっている道路や鉄道や並木には嘆声を発する。しかし、こういう「尋問」が後半部で彼を待ち構えていた。

> 部長（晋州警務部長）は私に茶を薦め、パイプをくわえながら言う。
> 「どうです。京城を離れる時の朝鮮観と今の朝鮮観のちがいは？」

総督府機関紙が李光洙に贅沢な全国旅行と原稿料を提供した根本的な理由が鮮やかな形で現れてくる場面である。青年民族主義者として名望の高い彼を警戒の目で見ている警察官の単刀直入の質問の前で、彼は、実際にみたら、想像とは違う（発展している）と答える。毎日申報社や阿部が期待していた正解を、李光洙が鮮やかな形で提出する決定的な場面であった。

退職後、朝鮮の自治運動に携わっていた阿部が1936年１月、困窮の中でこの

世を去るまで、二人の関係は続いた。積極的な戦争協力を余儀なくされていた1939年、李光洙は阿部について次のような回顧談を残したことがある。

> 時局の話とか、内鮮融和とか、さう云う話を翁の口から聞いた覚えはない
> （「無佛翁の憶出」（１）『京城日報』1939.3.11）

> 翁が京城を出発する時の南大門駅頭の見送人は、実に大したもので、朝鮮人間から殆ど、あらゆる階級を網羅したと聞いた。＜中略＞私の如きも翁に対して求むるものなく、翁も私に対して求むるものなき、さう云う交わりであったのであるが、阿部さんは本当に私を愛し、大事にしてくださると、二十年一日の如くしみじみ感じ通して来たのであった。
> （「無佛翁の憶出」（２）同、3.12）

二人は、互いに求めることのない美しい関係であったと、李光洙は阿部との関係を必死に美化している。これは、実は求め合うことが非常に多かったという事実の反証であろう。

阿部は李光洙の前で「内鮮融和」などの話を口にしたことがないかも知れないが、それは張志淵の場合も、尹用求の場合も同じであったのである。何よりも阿部は総督府機関紙の社長であり、「内鮮融和」の実現のために、金玉均と結んだ盟約を実現するため、献身している人物であったに間違いない。彼は若い李光洙に要求すべきことを要求し、李光洙は得るべきのことを得ただけである。阿部が李光洙を呼んだ理由も、李光洙がその要求に応じた理由も、そういう取り引きの計算があったからであるといえる。

６．武断統治時代に交渉政治の空間を開いた阿部充家

初代の朝鮮総督であった寺内正毅は、武断政治、恐怖政治の代名詞と知られている人物である。彼は、日本の朝鮮併合に功のある朝鮮貴族階級を統治に利用していたが、それは逆効果をまねくだけであった。総督府の機関紙である『毎日申報』・『京城日報』社の総監督であった徳富蘇峰も、朝鮮統治の方針の面においては、寺内と大きな差はなかった。その時に両新聞社に社長として赴任してきた人物が、徳富蘇峰の心服であった阿部充家である。彼に任された任務は、日本による朝鮮併合の必然性と同化主義を宣伝することであったが、その任務の遂行スタイルは寺内や徳富とは大きく異なっていた。恐怖と抑圧で一貫して

いた寺内スタイルとは異なって、彼は低い姿勢で朝鮮のリーダたちと会い、対話を交わしながら説得を図るコミュニケーションスタイルを持っていた。また、彼は朝鮮の文化や歴史を尊重する現地中心主義的な思考方式も持っていた。

こうして彼は、政治的な亡命や武装闘争の代わりに、植民地空間の中で生存する道を選んだ朝鮮の知識人との間に、対話と妥協、折衷、交渉の余地があった独特な政治空間を作り出した。彼が多くの朝鮮人に愛鮮者であるとよばれていた点、反日民族主義者であった多くの知識人の中の一部が彼に自発的に協力したのは、そのためであった。恐怖の憲兵政治で一貫していた「寺内政府」の下で、対話と交渉が可能な柔らかい政治空間を開き、長期的で安定的な植民地統治の基礎を構築するに寄与したこと、これが阿部充家の政治的な役割であったといえる。